

## 調査報告

## 看護実践能力を養成するためのカリキュラムのあり方と今後の課題

永井 紅音

(2017年1月5日受稿)

**抄録：** 近年、医療の高度化や入院患者の高齢化等、社会情勢の変化により専門職として看護師に求められる役割と機能は拡大し、これらの変化に応えることのできる人材を育成することが求められている。学士課程における看護系人材養成においては、卒業時の到達目標に基づいた看護実践能力の獲得が課題となっている。さらに大学改革では「学士力」の獲得が強調されている。

本稿は、看護師に求められる看護実践能力の育成、学生の主体的な学びの確立の視点から、本学のカリキュラムを元に単位数や授業時間数、学士課程における看護教育のあり方と今後の課題について検討した。7領域の臨地実習科目を履修するために必要な科目は実習に先行し配置されていたが、各々の臨地実習の順序や全体を通して段階的な到達度が明確でないことから、今後は卒業時到達目標に向ってカリキュラム全体の科目間の調整、学生の主体的な学びの確立に向けた時間の配分や教授学習法の検討が課題である。

キーワード：カリキュラム、看護実践能力、統合、臨床状況下での学習

## I. はじめに

看護教育の内容と方法に関する検討会報告書において、看護師教育の現状と課題が示され、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法として、講義・演習・実習の効果的な組み合わせについて以下のように述べられている。学生は、臨地実習において講義や演習で学んだ知識を統合して個別の対象者に合わせて看護を提供できるようになることが期待される。そのため、演習で判断する能力を身につけ臨地実習において実際の看護実践のダイナミズムの中で体験して学んだ看護を基に、更に必要な知識を学ぶというような繰り返し学習方法が必要である<sup>1)</sup>。

学士課程における看護師教育については、平成23年文部科学省大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会において、学士課程では看護を取り巻く幅広い知識体系を学び、社会や環境との関係において自己を理解するための素養や、

創造的思考力を育成するための教養教育を前提に健康の保持増進・疾病予防を含めた看護師等の基礎となる教育を充実していく必要がある。これに加えて、医療の高度化や看護ニーズの多様化等に対応していくための教育を充実するとともに、専門職としての自発的な能力開発を継続するための能力や看護の向上に資する研究能力の基礎を育成することも重要であると述べられており<sup>2)</sup>、看護師のコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標としてⅠ群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力、Ⅱ群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、Ⅲ群 特定の健康課題に対応する実践能力、Ⅳ群 ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力、Ⅴ群 専門職者として研鑽し続ける基本能力の5つの群と20の看護実践能力が示されている。

また、平成24年中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」<sup>3)</sup>では、

学士課程教育は学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育が保障されるよう、質的に転換する必要がある。このような学士課程教育の質的転換の前提として、学生に授業時間にとどまらず授業のための事前の準備や事後の展開などの主体的な学びに要する時間を含め、十分な総学修時間の確保を促すことが重要であると提言されている。

パトリシアベナーは、看護専門職に必要な深く複雑な教育を検証するための経験的学習について、「徒弟式学習 (apprenticeship)」という言葉を使用し、師匠のやることを模倣するのではなく、創造的で批判的に思考すること、疑問を問いただすこと、更に革新していくことが専門職実践の学習では中心的なものだと考えている。また、臨床状況下における教育と学習により看護実践に必要な臨床的論証力、判断力を育てることが重要であり、そのためには臨床、実習室、教室での学びが

統合される必要があることを述べている<sup>4)</sup>。

本大学の大学の理念と教育目標は、「1. 未来を拓くチャレンジ精神、2. 科学的研究に基づく実学の追求、3. 充実した教養教育の確立、4. 国際性の涵養、5. 地域社会との連携」が理念として掲げられており、看護学科教育理念では、「看護学科の教育は、高度化する医療、多様化する保健福祉分野など、看護師にはより高度な専門知識と共に広い視野と豊かな人間性をも求められています。社会の変容に柔軟に対応できる看護師の育成を目指しています」と述べられている。看護学科の教育目標として、「柔軟な対応能力がある看護師として大切なことは、対象となる人々の身体と心と環境すべてを理解し、その人々を尊重し、チーム医療の要として他の関係メンバーと連携ができ、自らの役割と責任を果たすことです。看護師としての知識と技術を深めるだけではなく、社会に対して問題意識を持ち主体的に学習していくこと」を看護学科の教育目標としている。

表1 看護学科 ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー (本学ホームページより)

<p>ディプロマポリシー</p> <p>(1) 知識・理解 A. 人間の生命や権利を尊重し、生活統合体としての人間を理解するため、幅広い知識と教養を身につける。 B. 看護を実践する能力を高めるために必要な知識・技術を修得する。</p> <p>(2) 思考・判断 A. 対象の健康課題を専門的知識と技術を基礎に、科学的思考力・判断力により、その解決に向けて行動することができる。</p> <p>(3) 関心・意欲 A. 医療の進歩、健康増進に関する情報への関心を常に維持し、実践を通して自らの成長を促すことができる。</p> <p>(4) 態度 A. 保健医療福祉チームの一員としての役割を理解し、協働して活動する能力を高める。 B. 自己学習・自己評価をし続ける行動や態度をとることができる。</p> <p>(5) 技能・表現 A. 状況を的確に判断し、その状況に応じたコミュニケーションがとれる。 B. 対象に必要な看護ケアについて科学的根拠に基づく説明ができ、看護ケアを的確に実施することができる。</p> <p>カリキュラムポリシー</p> <p>1. 豊かな人間性、幅広い教養と多様な個性を発展させ看護の対象である人間の生命や権利を尊重し、全人的に理解する能力を養うため、教養科目を配置します。</p> <p>2. 人間の生活の場において、ヒューマン・ケアリングの視点に立った看護実践能力の基礎を養うため、看護技術の演習時間の充実及び臨地実習科目を配置しています。</p> <p>3. 看護実践に内在する倫理的諸問題を認識し、専門的価値に基づく倫理的判断力の基礎を養うために、人権擁護を基本とした専門基礎科目および専門科目を系統的に配置します。</p> <p>4. 主体的、科学的に思考し、かつ創造的に問題や課題を探究していく能力を養うために、以下の科目を配置します。</p> <p>1) 専門科目での演習などの協同学習やゼミナール、e-ラーニングを活用した教育技法を用いて展開する科目</p> <p>2) 看護の学習に必要な「課題発見・探求(解決)能力」と「コミュニケーション能力」を高める科目</p> <p>3) 将来看護専門職業人として活躍し、発展していくための「看護の統合」科目</p> <p>5. 保健・医療・福祉システムの中で、他領域の職種との連携・協働の重要性を理解して、目標に向けて推進できる基礎的能力を養うため、健康支援と社会保障制度の科目を配置し、また学部内の連携を図って科目の強化を行います。</p> <p>6. 国際的な視野を養い、多様な価値観に基づく社会の中で、人々の健康に貢献しながら自己の成長を希求する態度を養うため、諸外国の健康課題に関する内容を専門科目において展開し、国際保健学を配置します。</p>
--

今回、看護師に求められる看護実践能力の育成、学生の主体的な学びの確立の視点から、本学のカリキュラムについて2015年度学生便覧、平成27年度看護学科シラバスを元に単位数や授業時間数、年間配分、学士課程における看護教育のあり方と今後の課題について検討した。

## Ⅱ. 結果

### 1. 単位数、科目配置、科目の順序性について

保健師助産師看護師法指定規則の他、平成13年看護師等養成所の運営に関する指導要領、第5

教育に関する事項2履修時間数等（3）<sup>4)</sup>、看護師養成所 教育課程の編成に当たり97単位以上で3000時間以上の講義、実習等を行うようにすることとされている。また、単位の計算方法として臨地実習については1単位45時間の実習をもって構成することとされている。また大学設置基準において、卒業の要件は大学に4年以上在籍し、124単位以上を修得することとされている。本大学看護学科における卒業に必要な単位は128単位3075時間であり、上記の条件を満たしている。

表2 学年別履修単位の年次配分について（2015学生便覧を元に算出）

	1年次	2年次	3年次	4年次	卒業要件	
必修	32 単位	47 単位	22 単位	16 単位	117 単位	128 単位以上
選択	11 単位				11 単位以上	
合計	43 単位	47 単位	22 単位	16 単位		

※ ③選択科目の履修方法に基づき1年次の推奨される単位数は必修科目32単位と選択科目11単位の合計43単位で算出（2年次以降専門基礎科目と専門科目が多くなるため、1年次のうちに教養科目から11単位以上の選択科目を履修しておくことを勧める）

表3 看護学科における学期別学修時間（2015 学生便覧を元に算出）

1年前期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計	3年前期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計
講義	17	255	510	765	講義	3	45	90	135
演習	3	90	45	135	演習	9	270	135	405
実習	1	45	0	45	実習	0	0	0	0
計	21	390	555	945	計	12	315	225	540
1年後期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計	3年後期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計
講義	16	240	480	720	講義	0	0	0	0
演習	6	180	90	270	演習	0	0	0	0
実習	0	0	0	0	実習	10	450	0	450
計	22	420	570	990	計	10	450	0	450
2年前期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計	4年前期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計
講義	25	375	750	1125	講義	0	0	0	0
演習	5	150	75	225	演習	1	30	15	45
実習	0	0	0	0	実習	10	450	0	450
計	30	525	825	1350	計	11	480	15	495
2年後期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計	4年後期	単位数	授業時間数	※自習時間	合計
講義	4	60	120	180	講義	3	45	90	135
演習	11	330	165	495	演習	2	60	30	90
実習	2	90	0	90	実習	0	0	0	0
計	17	480	285	765	計	5	105	120	225
					合計	128	3165	2595	5760

※自習時間については、文部科学省「大学設置基準」を元に算出

表4 1単位の1週間当たりの学修時間と単位 (学生便覧2015)

授業の形態	授業時間	自習時間	計
講義	15 時間	30 時間	45 時間
演習	30 ～ 15 時間	15 ～ 30 時間	
実験・実習・実技	45 ～ 30 時間	0 ～ 15 時間	

※講義1単位15時間、演習1単位30時間、実習1単位45時間として算出

平成24年中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」によると、大学の卒業の要件は、原則として4年以上の在学と124単位以上の単位の修得であることを踏まえ、学期中の一日あたりの総学修時間は8時間程度であることが想定されているが、「全国大学生調査」によると我が国の学生の学修時間はその半分の1日4.6時間であるとの報告がある。

本学において、1単位の1週間当たりの学修時間は表4のとおりとされ、これを元に算出した結果、授業時間数では4年次後期の105時間を除いて315時間から480時間であるが（表3参照）、自習時間を含めると1年前期・後期、2年前期・後期については1学期あたり600時間を超過し、最高1350時間となっている。大学設置基準においては卒業の要件は大学に4年以上在籍し、124単位以上を修得することとされているが、本大学看護学科における卒業に必要な単位は128単位以上である。本学看護学科のある年度における卒業時の平均履修単位数は、平均133.4単位（最少130単位、最大140単位）であった。看護学科の学生は、講義や演習の前後には事前事後学習課題が課せられること、臨地実習の1単位の学修時間は自習時間は0時間として計算されているが、実際には事前学習や看護技術の自己練習の他、毎日の臨地実習時間終了後には実習記録の記載が必要であるため、1日8時間以上、1単位あたりの学修時間は45時間を超えることが推察される。しかし、本学の看護学科の学生に対し行われた学修時間に関するアンケート調査（平成27年度学生生活実態

調査より抜粋・平成27年9月24日実施）の結果では、1日の予習・復習に費やす時間について、ほとんどしないと答えた学生が42%、1時間程度が43%、2時間程度が13%であった。そのため、学修時間についてのアンケートの実施時期や回答における自己学習の認識や内容、実際の臨地実習中の1日当たりの学修時間については、今後詳細な調査が必要であると考え。

看護学科では大学の理念を踏まえ、看護学科のディプロマポリシーが作成され、それを踏まえカリキュラムポリシーが作成されている。カリキュラムチェック表に基づき各科目の内容、履修条件および科目の連続性が決定されている。教養科目、専門基礎科目、専門科目が積み上げ方デザインで構成されており、教養科目に建学の理念を取り入れ、人間の尊厳を倫理面、制度・経済、文化など多角的な視点から理解を深めるための基盤づくりとしている。外国語に「中国語」「ロシア語」を選択科目として設け、北海道文教大学の地域性特性を生かす工夫をしている。

## 2. 専門基礎科目、専門科目について

専門基礎科目は、人体の構造と機能、疾病の成り立ち、健康支援と社会保障の3つの分野25科目に分かれており、臨床薬理学を除いた24科目が専門科目に先行し、1年次と2年次に配当されている。専門科目は、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護学、看護の統合と実践、臨地実習で構成されている。基礎看護学の8科目と成人看護学概論、在宅看護学概論のみ1年次に配当され、それ



以外の科目は2, 3, 4年次に配当されている。公衆衛生看護学概論, 現代社会と福祉, 保健・医療概論, 社会保障・福祉論, 関係法規, 健康医療システム, 公衆衛生看護学概論, 保健医療福祉行政論, チーム医療概論については, 科目の目的は異なるが社会保険法, 福祉法, 医療保険制度, 生活保護制度については複数科目において取り上げられていた。今後の課題として, 科目担当者間で学生が到達すべき目標を共有, 調整し授業を計画し行うことで学生が看護と関連する法律についても学びを統合しながら理解を深めるために役立つのではないかと考える。看護過程については, 2年次に学び, その内容を基本として成人看護学・老年看護学・小児看護学・母性看護学・精神看護学・在宅看護論の7分野で展開され, 各分野において用いる看護論や記録様式を定めている。

### 3. 臨地実習について

1年次に基礎看護学実習Ⅰ, 2年次に基礎看護学実習Ⅱ, 3年次に母性看護学実習, 小児看護学実習, 成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ, 4年次に老年看護学実習, 精神看護学実習, 在宅看護論実習, 継続統合看護学実習の7分野10科目の合計23単位配当されている。各領域の臨地実習科目を履修するために必要な科目は臨地実習の履修要件となっており, 臨地実習に先行しているが, 必ずしも臨地実習の直前に配置されておらず, 科目の配置について配慮する必要があるのではないかと考える。また, 3年次, 4年次の各領域の臨地実習の履修順序は各学生によって異なっており, カリキュラム全体からみた段階的な到達度や評価については明文化されていない。継続統合看護学実習は, それまでのすべての臨地実習の単位を履修していることが履修要件になっているが, 最終的に学生の総合的な看護実践能力・卒業時到達目標達成について評価する方略の構築は十分とは言えない。

## Ⅲ. 考察

### 1. 単位数, 科目配置, 科目の順序性について

各学期における時間数については, 2年前期に講義が集中しており期待される自習時間を含めると過密な状態であることが推察される。学生の生活時間からみた十分な学習時間の確保と主体的な学びを確立するため, 臨地実習の履修要件を考慮しながら, 学期毎の履修単位の配分の平準化を検討する必要があると考える。

パトリシアベナーは倫理について学ぶ必要性について以下のように述べている。看護プログラムから教育を改善するため, 倫理のカリキュラムを設計し直す必要性について, 看護学生は批判的倫理学とジレンマの倫理学を学ぶ必要があるが, 同時に関係性に関連する日常の倫理的態度やケア倫理についても学ばなければならない。看護学生は, 日常的倫理的態度と看護という職業の核をなす善の概念について学ばなければならない。看護学生は, ケアと責任の倫理, 看護職内におけるセルフケアの精神, かかわりのスキル, そして臨床的論証を学ぶ必要がある<sup>5)</sup>。そのため, 看護の基本となる概念を身につけるため, 本学科においても教養科目の中に倫理学, 論理学, 哲学等の科目の追加を検討する必要があるのではないかと考える。

### 2. 専門基礎科目, 専門科目について

臨床状況下における教育と学習により看護実践に必要な臨床的論証力, 判断力を育てるためには, 講義や演習において臨床の状況をイメージできるような教授法を展開していくことが重要であると考え。そのためには, カリキュラムの最初の段階で実際の臨床の状況を見学する機会を作ることや, 画像や動画等の視聴覚教材の活用やシュミレーション, 学科全体で臨床状況に近い共通の事例を作成し, 4年間を通し利用していくことも学びを統合するために有用ではないかと考える。現在の領域別の科目の他, 一例として生活機能や看護過程をベースとし, 一つの疾患を取り上げ解剖生理, 形態機能と病態生理, ライフステージ各期による違いや対象者を取り巻く環境やそれに関係する社会保障制度等についても統合し学ぶ方法

や、疾病に対する看護を学ぶ前に人間の健康生活や一次予防について学んでいく方法についても今後検討していきたいと考える。現在、3年次、4年次における臨地実習における各領域実習の順序については、それぞれの学生で異なっているが、実習受け入れ先の制約があるため全員が同じ順序で実習することは不可能な状況にある。しかし、その順序性における学習効果の違いについては検討されておらず、また臨地実習において個々の学生の進捗に照らした上でどのように指導するかについても個々の領域に委ねられている状況である。今回は、並行する各領域における看護過程の関連性や順序性における到達度については調査しておらず、4年間を総合的に考えた視点から、それぞれの到達目標を設定し教育を行っていくことも必要ではないかと考える。そして、最終的に学生が臨地実習とその他の履修を全て終了した時点で、学士課程における卒業時到達目標を達成できているかを確認するための適切な方略の構築も必要であると考え。今回は、それぞれの授業内容や臨地実習の学びの内容については検討していないため、今後検討していく必要があると考える。

Malcom S. Knowlesは、成人は新しい経験をつなぎ合わせる豊かな経験の基盤をもっている。新しい学習は、それらをわれわれの過去の経験と関連づけていくことにより、意味づけがなされていくだろうと述べている<sup>6)</sup>。看護実践に必要な能力を養成するため、先行科目やそれに関連・並行する科目間での調整を行い個々の教員が全体の統合を意識し授業が構成され、それらについて学生にも周知し学びを統合しやすいように授業が展開されることが重要であると考え。また、パトリシアベナーは教師が現在の臨床に精通していることの重要性についても述べており、看護実践能力を養成する教育のため、教員自身が最新の臨床の情報や知識と看護実践能力を持ち、学生が統合すべき学習内容を十分に理解した上で教育を行っていくことが今後の課題であると考え。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、終始熱心なご指導をいただいた天使大学大学院助産研究科 近藤潤子特任教授に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」平成23年2月28日  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
- 2) 文部科学省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告 平成23年3月11日」大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf)
- 3) 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）平成24年3月26日中央教育審議会大学分科会 大学教育部会  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf)
- 4) 厚生労働省「看護師等養成所の運営に関する指導要領」平成13年1月5日最終改正：平成24年  
[https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/yoryo\\_kango\\_shido.pdf](https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/yoryo_kango_shido.pdf)
- 5) Patricia Benner, Molly Stuphen, Victoria Leonard et al. : EDUCATING NURSES 2011 早野ZITO 真佐子訳：ベナー ナースを育てる。35-37, 120-134, 321. 医学書院, 2011.
- 6) Malcolm S. Knowles : THE MODERN PRACTICE OF ADULT EDUCATION : 1975. 堀薫夫, 三輪健二監訳：成人教育の現代的実践 ペダゴギーからアンドラゴギーへ。50, 鳳書房, 2002.

## The Current State and Future Problems Regarding Curriculum for the Development of Nursing Competence

NAGAI Akane

**Abstract:** In recent years, social changes such as advances in medicine and the aging of inpatient population have placed increased demands on the function and role of specialist nurses, and there is a need for the development of staff capable of meeting these changes. With regard to the development of nursing staff in undergraduate programs, the meeting of target competencies by the time of graduation is a current area of concern. Furthermore, we would like to emphasize the acquisition of “graduate attributes” call the skills expected of a graduate as part of the university reform. In this study, with the aim of fostering students’ nursing competency required in clinical settings and establishing students’ independent learning, we examined how many credits and hours should be set and how the undergraduate curriculum should be constructed, as well as discussing the current state and future problems regarding the curriculum at our university. We set in place the subjects to cover the 7 domains necessary for practical training prior to training; however, as the sequence of the practical training and the step-by-step achievement of the overall training course itself are not clear, there are concerns with how the subjects comprising the overall curriculum should be adjusted in terms of the targets to be achieved by graduation as well as with establishing students’ independent learning, how many credits and hours should be set and how the learning process should be constructed.

Keywords: curriculum, nursing competency, integration, learning in clinical situations